

第117回山口西田読書会（2016年7月9日）

第116回（同年6月18日）の Protokol

参加者：佐野、岡田、桑原、谷、千葉、唐、橋本、深野、岡部（計9人）

『善の研究』第3編第10章「人格的善」

第1段落 人間の善

意識は種々の活動の総合であり、要求もまたおなじである。そのような理解から自己全体の善とは何かを考える。

第2段落 自己とは全体の統一

意識は単純ではなく複雑な要素を含んでいる。要素は独立ではなく意味を持っている。その時だけではなく一生の意識も体系をなしている。それら「全体の統一」が自己である。

第3段落 善は調和、中庸、統一

善とは全体との関係において善となる。活動説の立場から、善とは種々の活動の一致調和あるいは中庸といえる。

調和の論者：プラトン、シャフツベリ

中庸の論者：アリストテレス、『中庸』（子思）

第4段落 精神→観念→理性の法則

調和、中庸とは体系的秩序の意味である。意識現象は単純であっても観念の要求をそなえており、観念活動が背後ではたらいっている。理想を抱いているともいえる。観念活動は精神の根本的な作用であり我々の意識はこれに支配されている。これより起こる要求を満足するのが善である。観念活動の根本（観念と観念のもっとも一般的で根本的な関係）は理性の法則であるから理性の満足が最上の善である。

論者：シニック、ストイック／プラトン（晩年）、アリストテレス

晩年のプラトン、アリストテレスは理性の法則によって他の活動を統御、支配するのも善であるとした。

第5段落 自他を超えた意識の統一力（唯一の力）＝人格＝善

ある意識が他の意識を統御すると考えても、我々の意識は一つであり、その根柢には唯一の力（深遠なる統一力）が働いている。それは意識の内容を離れて存在するのではなく、むしろ意識を支配する。また、それは分析理解すべきものではなく、直覚自得すべきものである。そのような統一力を人格と呼び、善はその人格（統一力）の維持発展といえる。

第6段落 真の自己

無意識の能力、本能作用は有機作用より起こる物力であり、人格の力とはことなる。また、意識の表面的な中心にある主観的な希望のようなものでもない。むしろ、その希望が没したときに人格は現れる。かといってカントの言うような、まったく経験的な内容を離れた一般的な純理でもない。

その人にとっての特殊な意味を保ちながら、知情意、主客の区別のない意識本来の状態（宇宙統一力）が現れ出たものが人格であり、その要求はきわめて厳粛である。